【参考資料】

『希望の小径』の構想

金沢工業大学建築学部建築デザイン学科　蜂谷研究室

※この構想は、第３回高岡市復興会議（10月１日開催）において、復興会議委員 金沢工業大学 建築学部 蜂谷教授より提案されたものです。

伏木震災復興計画案　『希望の小径』

令和8年10月1日



金沢工業大学建築学部建築デザイン学科

蜂谷研究室　蜂谷俊雄 ＋ 越前凱胤士



内水対策の既存排水路

公費解体後の伏木の空地状況（令和8年3月）



【拡大版：参考】玉川～中道～石坂町エリアの空地状況

復興イメージの共有

地域全体で共有する魅力ある未来のイメージを明確に示さなければ、インフラが復旧しても新たな移住や投資は生まれず、30～40年先の復興の夢は実現しない。

伏木復興の基本方針

① 現在の空地の状態には、地震前からの空地、駐車場、公費解体後の空地の３種類がある。「火災での全焼」や「被災での全失」とは異なる。今後さらに解体が進むことが予想されるが、現時点での残存家屋を避けて計画案をたて、この考え方を複数街区に連続させていく。

② 伏木復興の基本方針は、大規模集客施設を誘致するのではなく、住居・商業がバランス良く複合した人間のための自然豊かな居住環境とする。

③ 現在の最悪の状態を逆手に取り、全国に類を見ない街の魅力を創り、その魅力に惹かれて新たな住人が居を構え、次に、恵まれた環境で暮らす人々の活動や景観の魅力で観光客も集まり、さらに、魅力ある場所に商業用途の不動産投資が活発になる好循環を生み出す未来の伏木像を描く。

『希望の小径』というコンセプト

『希望の小径』は、全国共通の街区形式と異なり、道路で囲まれた街区内に人間のための緑豊かな小径・路地・小公園を挿入し、各街区を繋げていくものである。日常的には地域住民の散策路であるが、勝興寺を訪れる観光客も各街区まで足を延ばし、小径を巡るシーンが想像できる。この小径空間を伏木モデルの復興居住環境とし、新しい発想の高岡市の遊歩道状公園とする。

駐車場計画

例えば7m道路の通りの建て替えが順次進む過程で、各建物前に駐車場をとると、7m道路の両側に6mの駐車場が連続し、通りが19m幅として認識される。しかし、現在の空地状態を見ると、まとまった駐車台数を街区の内側に配置させることは可能であり、車の出入口も通りとは別の脇道側にとることができる。狭い通りを曳山が通るシーンを次の時代も継承する。

新しい街路景観

駐車場を街区の内側に配置すると、道路境界の内側に1.5m程度の連続した半屋外スペースを確保することが可能になり、伏木モデルの街路景観が生まれる。豪雪地帯の雁木空間は有名であるが、伏木モデルでは建物ごとに小庇空間を設け、店の場合は商品を並べ、住居の場合は植木鉢の棚を並べ、あるいは井戸端会議が生まれるような家具を並べるなど、建物ごとに工夫された表情が道路側に現れる。ヒューマンスケールの街路を残すことは伏木らしさの継承であり、曳山が似合う街並みでもある。

『小径』 の参考イメージ





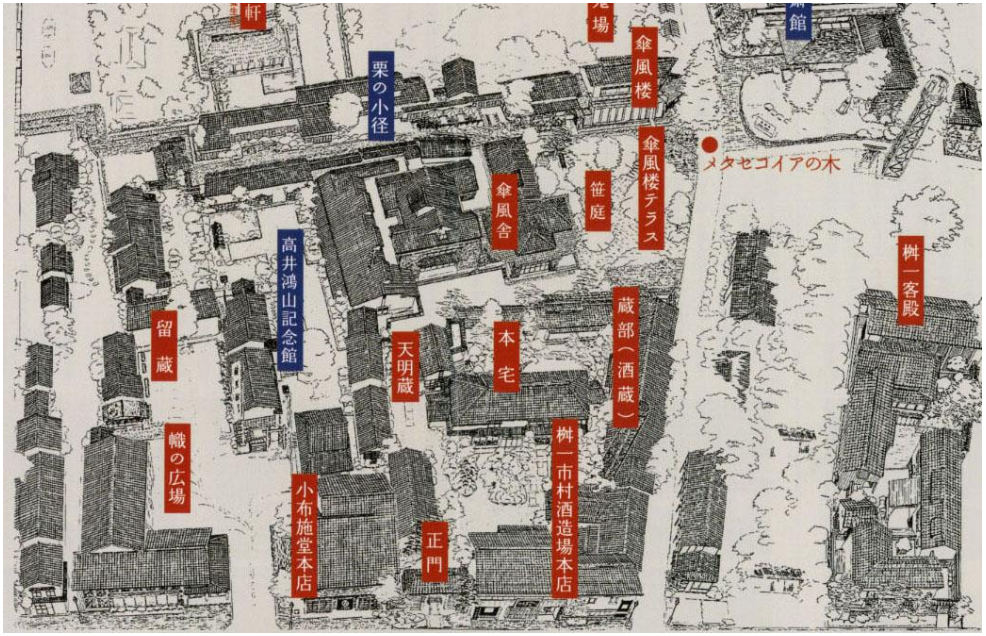
1981年

コルドバの『バラの小径』

2013年



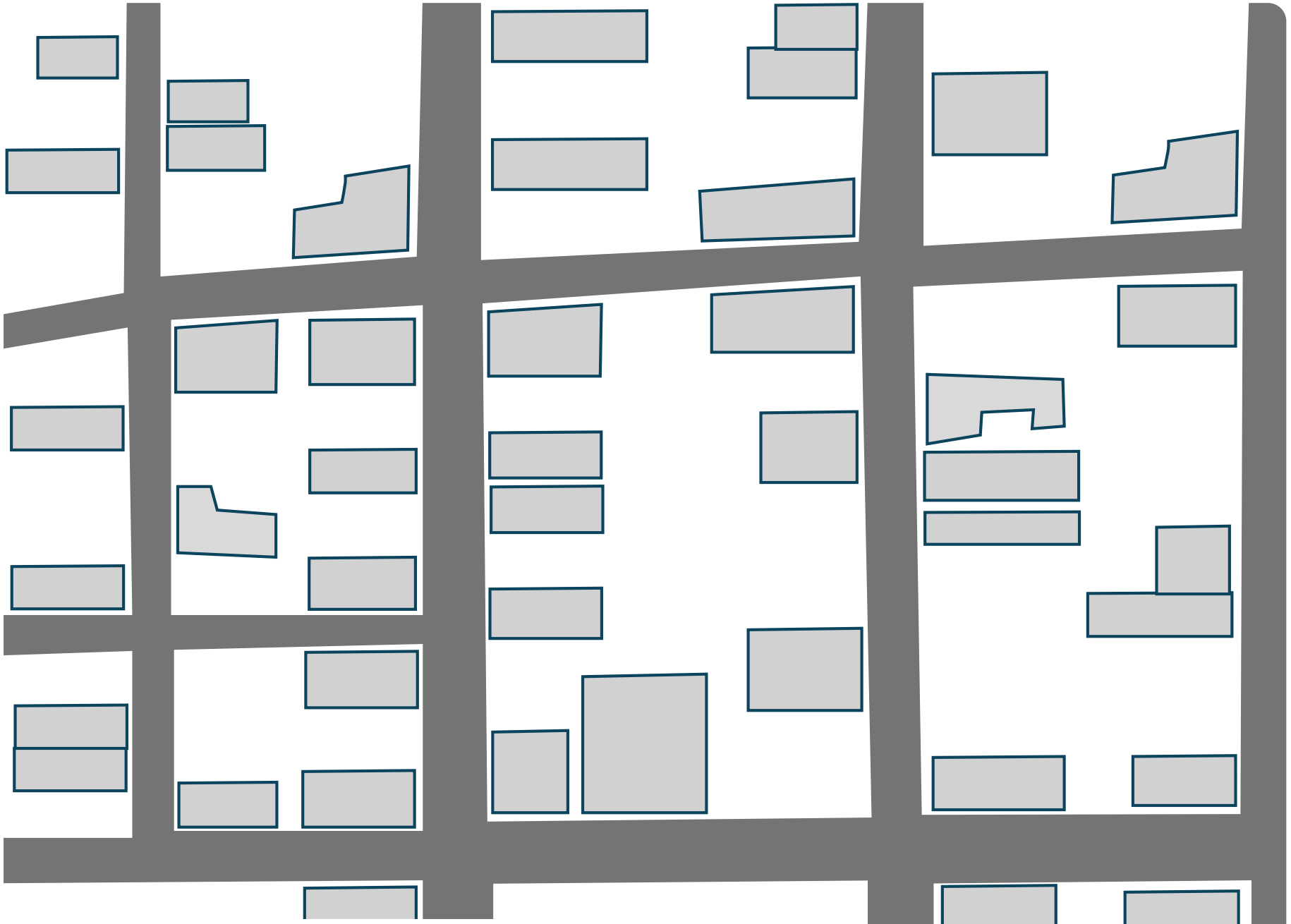




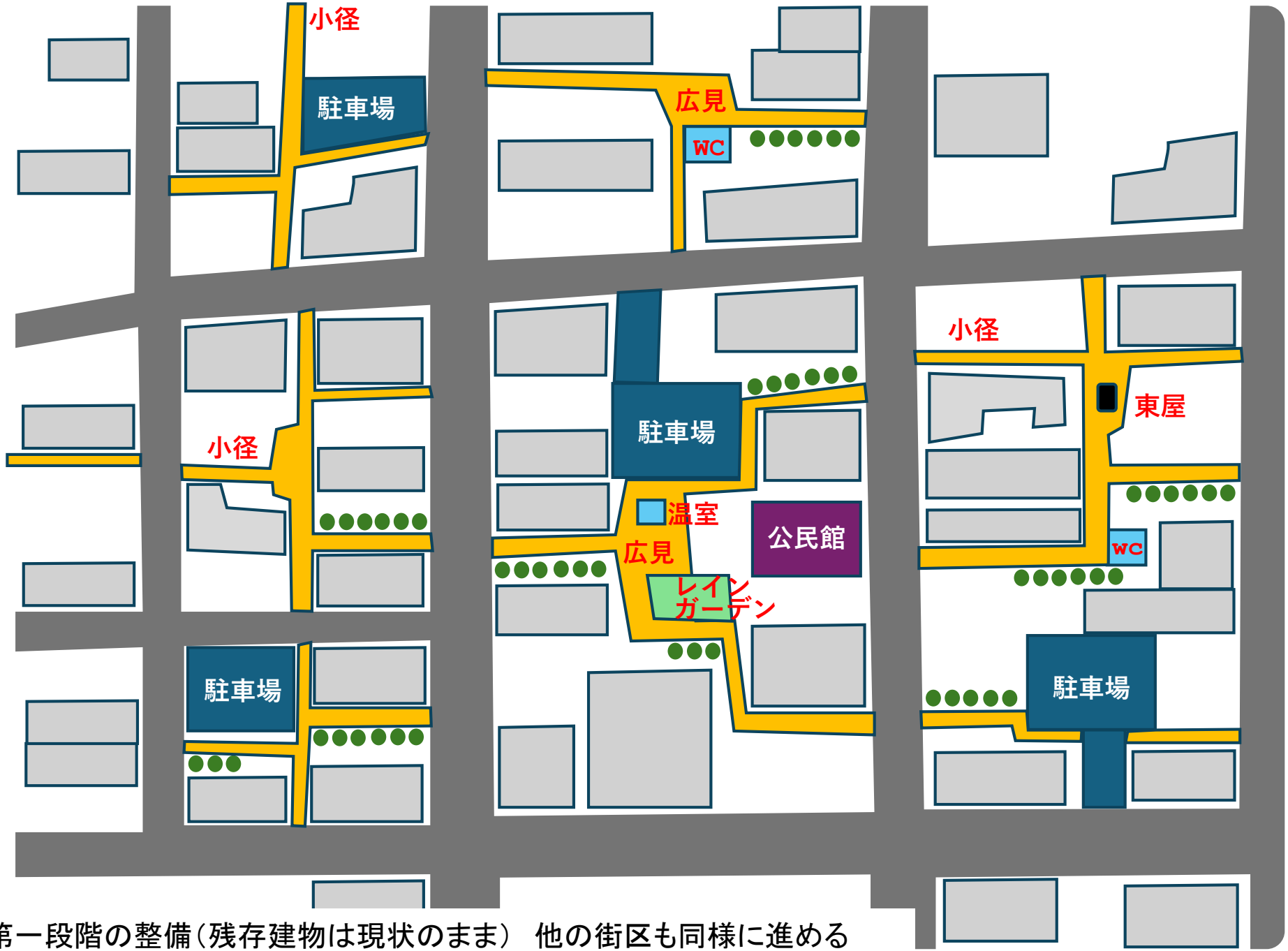
小布施『栗の小径』







第一段階の整備 （残存建物は現状のまま残す）



第一段階の整備（残存建物は現状のまま） 他の街区も同様に進める









第一段階整備（残存建物は現況まま）

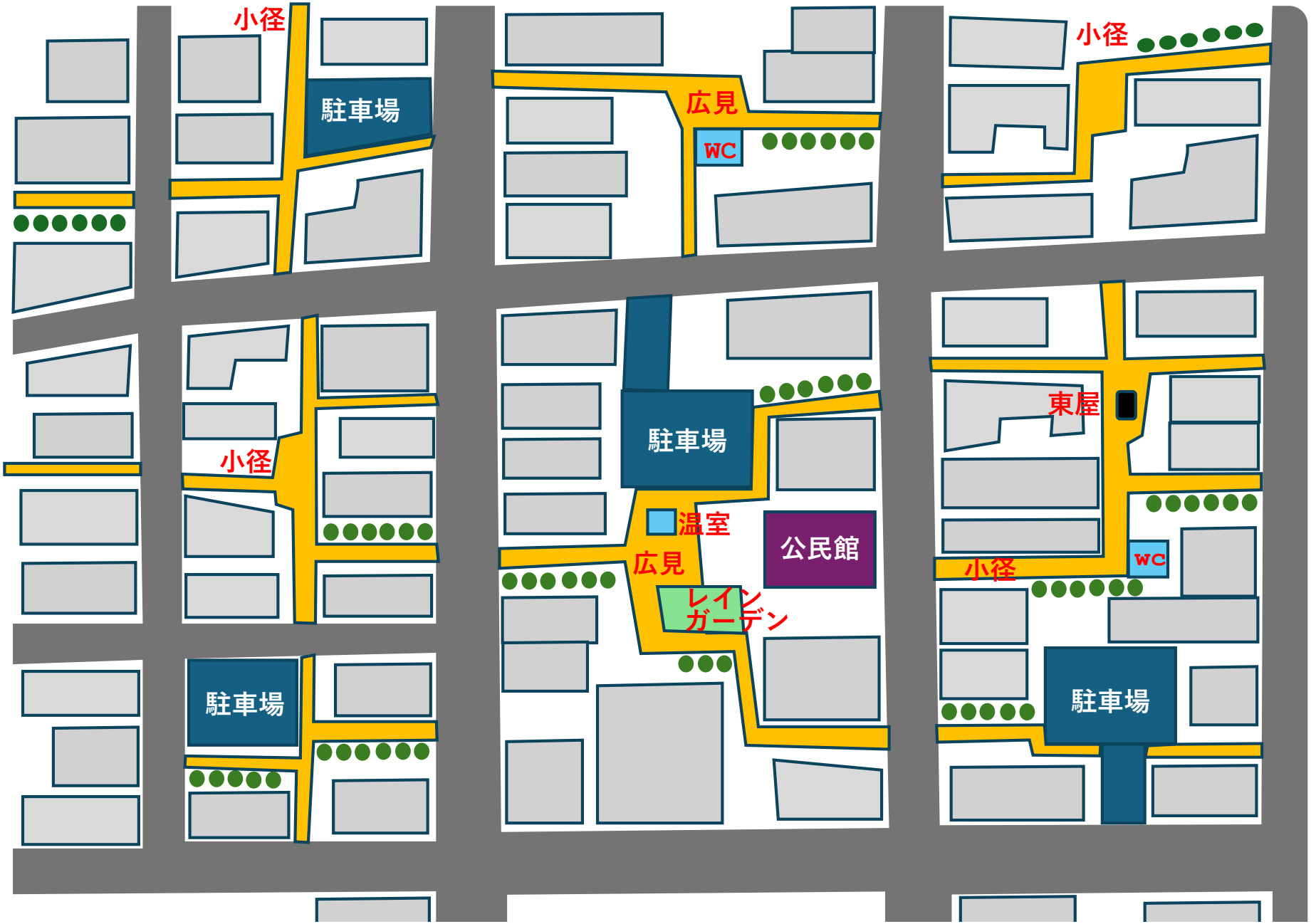


最終段階（40年後）の鳥瞰イメージ　　海（北）側からの鳥観図

最終段階（40年後）の整備完成図



最終段階（40年後）の鳥瞰イメージ　　東側からの鳥観図



最終段階（40年後）の配置イメージ　震災直前に新築された建物も含めて全ての建て替えが終了



街区内側に 小径・ 小公園・駐車場を内包



街区内側に小径・広見（子供の遊び場等）を内包



駐車場の出入は脇道から



街区内側に小径 ・ レインガーデンを内包



小径の両側にある店舗・休憩所・小公園



冬の季節も楽しめる温室内の草花



小径の散策路にある公衆トイレ



街区内に入る小径と公民館



日常シーン
敷地境界内側に約1.5mの賑わいゾーンが連続



景観調整された連続する賑わいゾーン
各店・住居の特徴を演出　街区内に繋がる小径

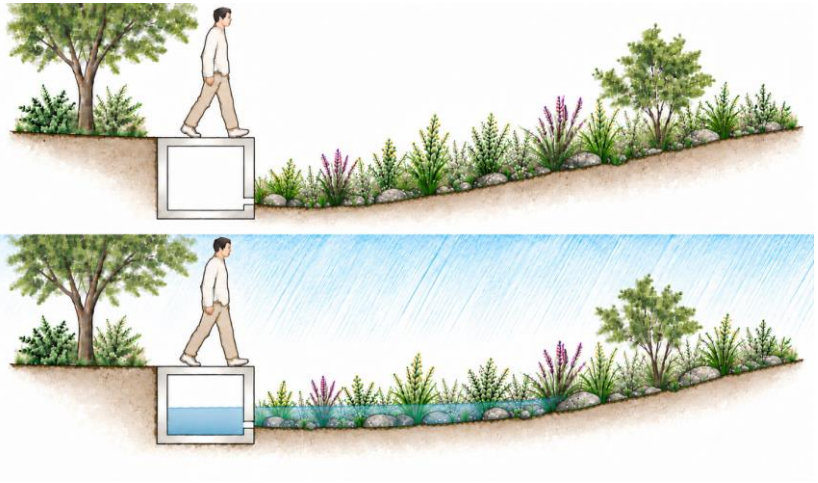


曳山祭りのシーン　　2066年
曳山が映えるヒューマンスケールの街並を継承



昭和40年の曳山祭りのシーン
1965年





レインガーデンエリアの
鳥観図



暗渠排水路の内水を活かした
レインガーデン

晴天時のレインガーデン



雨天時のレインガーデン



段階的整備

復興計画が完成するのは30～40年先になりそうである。整備のプロセスを大まかに3段階に分けて説明するが、今後の状況の変化に対応しながら、具体案は刻々と変化していくものと想定される。

（1）第一段階

空地を選んで各街区に『希望の小径』（遊歩道＋小公園）、さらに駐車場を挿入する。この小径は、主要街路と直交するするように配置され、各街区を通り抜け、伏木の中心市街地を貫いて連続する緑豊かな散策路になる。

さらに、各小径に直交するように路地を配置することで、各街区の内側に面的に広がる人間のための遊歩道状公園が生まれる。この状態が隣の街区に連続すれば、旧市街地全域に広がっていく。

この小径の両側には低木植栽帯や中・高木が植えられ、場所ごとに特徴を出すために「アジサイの小径」、「バラの小径」などと命名する。また、小径の所々には園路を拡張した小公園をつくり、休憩ベンチや東屋を設置する。さらに、散策用の公衆トイレ、冬でも花が楽しめる温室、復興の拠点となる公民館などを小径に沿って配置していく。

ここまでの第一段階の整備は高岡市の遊歩道状公園として整備を進めるが、その前提となる土地所有の区画割り変更の交渉は、まちづくり会社が主導する。

この復興整備の未来像を、早い段階で社会に公表し、時間をかけて伏木が復興していく共通イメージを社会に広げる。そして、新しく伏木に移り住む人や、投資をする事業主を呼び込む。

（2）途中段階

復興イメージが共有されると、古くなった家屋や土地を売却する人、あるいは自らが事業主になって店や事業所を開設する動きが始まる。本エリアの将来像が魅力あるものであれば、不動産業界も活発に動き出し、『希望の小径』を骨格とした各街区に、住居や店以外にも様々な投資がなされるようになる。

（3）最終段階

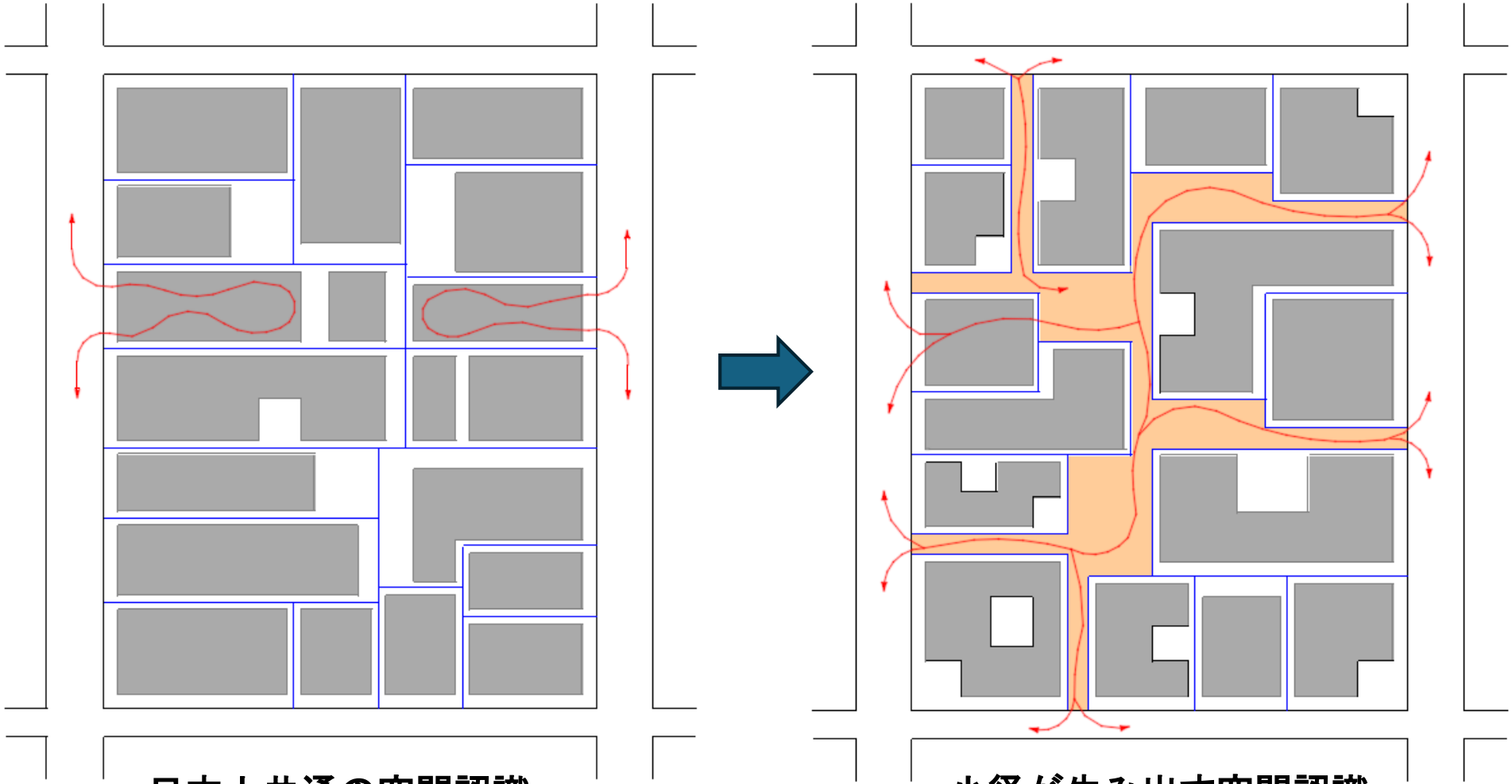
最終段階では震災直前に建てられた家屋も建て替えの時期がくる。この段階で建て替えられる建築物は、復興整備計画のフィニッシュを決めるものになるが、30～40年先の社会の在り方や人々の価値観の変化を予測することは難しく、未来の伏木の人々の創意工夫に委ねることにする。

本計画案の骨格となる概念図

街区の内側に『小径』を挿入することで、住人の空間認識を変える

① 「街路を介した近隣関係　」 ⇒ 「街路＋小径を介した新しいコミュニティ」

② 小径を内包する複数の街区が繋がることで、旧伏木の中心地は生まれ変わる



日本人共通の空間認識

小径が生み出す空間認識

本計画案の重要なポイント

① 現況を活かして小径を挿入することで、街区内部の骨格を変え、街区の内側に人間が主役の自然豊かな居住環境を創る。（他に類事例がない伏木復興モデル）

② 街の特徴・集客力を、「港町の活気」から「理想の居住環境」に変換し、次の時代に引き継いでいく。
（莫大な費用を要さない）

③ 本構想案の魅力を高岡市が発表することで、当地に戻りたい、移り住みたいという人々や、観光ビジネスへの投資を呼び込む。

④ まず最初に高岡市が小径（歩道状公園）を整備し、小径で繋がる街区の連結という明確な骨格を創る。

⑤ 次に、小径が街を網羅する明確な骨格を前提に、公民館的な活動拠点整備、東屋、公衆トイレ、レインガーデン、温室、駐車場などのアイディアを肉付けしていく。

⑥ 復興の明確な骨格が決まることで、今後の復興まちづくりの議論が加速し、内容が深まっていく。







